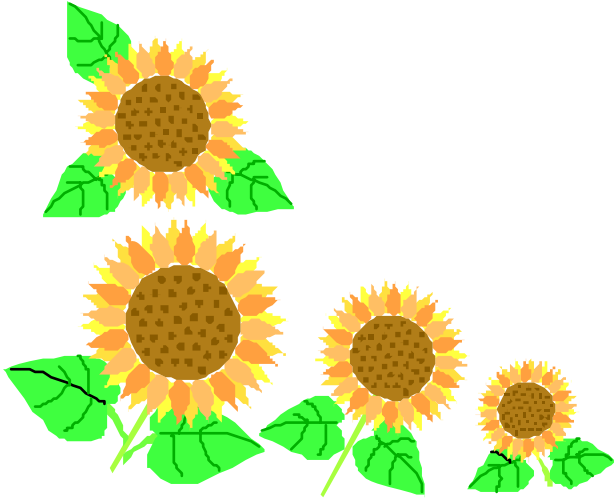


# 薬害のない明るい未来へ!

NO.6

09・7・23

東医研事務局発行



## 薬害イレッサ裁判 原告本人尋問

7月16日(木)午後1時半から、さち子さんの夫とみつ子さんの父の本人尋問が東京地裁で行われました。東医研から2名が傍聴してきました。

傍聴席はほぼ満席。被害がどのようにして起こったのか。どのような状況で亡くなっていったのか、聞いているのがつらくなる時間でした。国と製薬会社の反対尋問は責任のがれに終始し、怒りがわいてきました。

かんたんに証言と反対尋問の内容をお知らせします。

### さち子さんは、新潟で夫婦で30年来すし屋を営んでいました。〈証言〉

平成14年(2002年)7月に転移のある末期肺癌と診断されました。当初からイレッサという良い薬があるが、保険が利かないと言われていました。(この主治医はイレッサの臨床試験に関わっていた医師です。)初めは別の化学療法を何クールかやりましたが、血小板が減少して中止となりました。

翌年1月29日に入院し、イレッサを開始しました。さち子は「癌とともに生きるんだ。これさえ飲めば命は限定されても1時間でも充実した時間を延ばしたい」と期待していました。

「新聞などで問題になっているのでは?」と質問しましたが、20~30%の延命効果があり、副作用は軽い発疹くらいと言われ、内心とても安心した覚えがあります。

イレッサは8日後の2月8日に中止されました。間質性肺炎のためと言われました。

2月7日には動くときと苦しい状態で、刻々と弱っていった苦しみ始めました。ベッドに横になれない。呼吸できずにもがき苦しんでいました。息が吐けないのです。酸素マスクをしてもかえって負担になる感じでした。溺れ死ぬ感じです。左手は点滴などが4本も入っていて動かせないの、話しかけると右手に力を入れてかろうじてコミュニケーションがとれていました。あまり苦しむので私はベッドにのって自分の股のあいだにさち子を挟んで抱いている状態でした。

2月10日に医師に呼ばれました。「全力を尽くすが間に合わないでしょう」と言われました。そして2月11日に亡くなりました。

#### 〈反対尋問〉

肺癌と診断されたとき、余命4~6ヶ月。もっても1年と聞いていますね。

イレッサで間質性肺炎になって死亡している人がいたのは知っていましたね。場合によっては死亡することは分かっていたんですね。平成14年10月15日の緊急安全性情報は見ましたか?新聞は何をとっていましたか?イレッサの副作用のことがいろいろな新聞に載っていましたね。

イレッサの前にやった化学療法でいろいろな副作用があって、11月7日には化学療法中止と言われましたね。脳転移や骨の痛みも出てきていましたよね。

さち子さんはタバコを吸っていましたね。入院後も吸っていたことをご存知ですか。呼吸困難になる直前も吸っていましたね。

薬を飲んで1週間で亡くなって慙愧に耐えられません。さち子は「癌とともに生きるんだ」「命が限定されていても、これを飲んで1時間でも充実した時間を延ばしたい」と言っていました。

イレッサの同意書に最近 0.2~0.4%が肺炎で死亡していると書いてありますよ。説明を受けていませんか？

命が延びると期待していたのに、360度裏切られました。製薬会社や国は、人間の命をどう考えているのか。軽く見ているんじゃないかなあ。自分も今、進行性の胃癌にかかっています。残された人生を一生懸命生きていきたいと思います。世の中に、こういう思いが少ないほうが良いと思います。

### 危険性のあることを知っていたから先生に聞いたんだ<反対尋問に対する証言>

イレッサのことは肺癌の診断がされたときから聞いていたので関心を持っていました。新聞に出たときは新潟日報だけでなく、毎日朝日も読売も読みました。亡くなっている人が出ていることも知っていました。でも先生は良い薬だと言って、詳しいことは話してくれませんでした。自分のからだがこういうことになるんだよという説明があれば違ったと思います。患者は医者を怒らせちゃいかんのだよ。おおざっぱな説明しかなかった。微細な説明を聞いた覚えはない。「この薬は効くんだ」と医者に言われれば頼るしかない。この薬に裏切られ、裏目に出て、くすりによって命を絶たれるのは慙愧に耐えない。女房ともっと人生を語り合いたかった。



### みつ子さんはジュエリーデザイナーを目指して宝石店で働いてました<証言>

昭和59年に妻を亡くしましたが、みつ子と楽しく過ごしていました。みつ子は中高と器械体操や陸上、ブラバンドをやり、平成7年(1995年)にジュエリーデザイナーをめざして宝石店で働きはじめました。

2001年2月ころから、風邪をひいたようで咳や微熱、背中痛みがありましたが、会社には行っていました。2001年9月11日にO医師会病院に入院して検査を受けました。

<反対尋問>

癌と診断されたときに、余命の説明を受けましたね。早ければ6ヶ月~1年以内と。

9月末に肺癌が進行していると言われました。このときは本人には知らせませんでした。本人は意外と明るく、あまり病人らしくない入院生活を送っていました。

10月5日に退院してからは、家でテレビを見たり、彼氏と一緒に出かけたりしていました。時々痛みがあり週2~3回ボルタレンを飲んでいました。

ボルタレンだけでなく、ペンタジンやMSコンチンも使っていたことをご存知ですか。

11月28日にS赤十字病院に入院しました。治療のため本人に肺癌であることを告知しました。本人は「分かっていた。治療したい。どんな治療でもがんばるから」と抗がん剤治療をやりました。

イレッサの前にやった化学療法でも、たくさんの副作用がありましたね。食事がほとんど摂れていないと記録されています。

2~3回目からは副作用で食欲がなくなったり。でも月の半分は出かけられる生活でした。年末まで入院し、年末年始は自宅であっけらかんとして、楽しくしていました。2002年年始に病院に戻ったあとも、病院の中の友達と屋上でジョギングやキャッチボールをやっていました。2月11日に退院。

月1回の抗がん剤治療を続けました。

副作用で髪の毛が抜けたりしましたが、2002年7月の写真ではそんなに抜けたようには見えません。7月の始めころイレッサのことをインターネットで見つけました。

夢のような新薬という記事があふれていました。主治医に相談しました。医師も素晴らしい薬のようだねと言い、イレッサについて知っているようでした。

丸山ワクチンやアガリクス、プロポリスも使ったようですが、お父さんが勧めたのですか？

8月15日に医師からイレッサを使えるということを知られました。

医師からイレッサについて説明をうけた覚えはありません。同意書には副作用の欄に肺炎の記載があるようですが。その後大阪毎日放送の番組のなかで主治医が「この患者さんには副作用について話していない」といっているので間違いはないと思います。

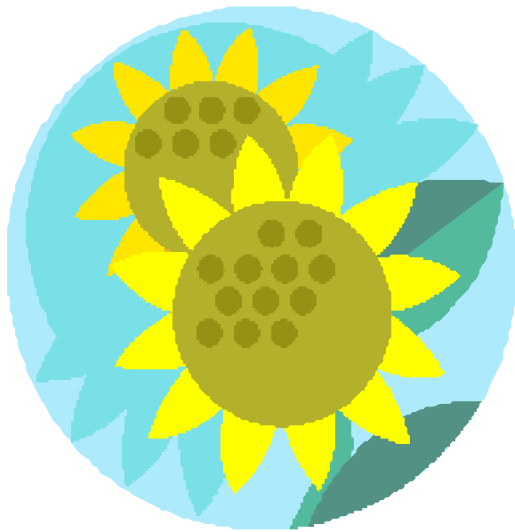
イレッサは8月15日から開始しました。21日に脳の放射線治療のために入院しました。外泊許可があると帰宅し、おいつこと遊んだり彼氏と出かけたりし、イレッサを服用していたけれど普段と変わりありませんでした。9月20日に脳と肺の写真を見て「ある程度良くなっているね。このままがんばろう」と言われました。8月に入院してから3ヶ月くらいから、呼吸をする様子が、息遣いが荒くなってきていました。酸素マスクをつけたりはずしたりで、自分で動くことはできていました。

10月3日緊急入院となりました。

トイレまでの2～3mもゆっくり歩かないと呼吸できない。スリッパのところに足をもって行ってあげないと立ち上がれない。

ベッドで横になっていられないので60～70度の角度にベッドを上げていました。部屋中にゼーゼーの音が響きわたり、酸素マスクをしていましたが、コックに目をむけて、もっと上げてもらいたいというそぶりをしていました。プリンやヨーグルトを口にし、たべものも水分も摂ろうという強い意志が感じられました。

入院時の入院治療計画書に「通常の細菌性肺炎ではない。イレッサによる肺障害の可能性もある」と書かれていますが、説明を受けませんでしたか。診療録には説明したと書かれていますが。



10月15日に緊急安全性情報のことを医師から聞きました。地獄のような苦しみの中でした。酸素マスクはなんの役にも立ちませんでした。

10月16日、前日の苦しさから解放されたのかな、母親のところに行くのかなと思いました。死への旅たちから、苦しみがなくなっていく感じでした。会話は出来ませんでした。

10月17日 苦しみ始めて1週間と1日で亡くなりました。病院から病理解剖の申し出がありました。

「自分の娘が想像を絶する苦しみの中で亡くなっていった。こんなにも苦しく呼吸の出来ない状態の原因を知りたい」と思い、解剖してもらいました。死亡診断書にはイレッサによる肺障害の可能性ありと書かれています。

10月15日までは感染症か結核の疑いだと言われていたのです。

剖検報告書からイレッサとの関連が十分考えられると思い、アストラゼネカ社に電話しました。診断書とみづ子の状態を話しました。担当の人は、副作用の報告は入っていないと言いました。私はインターネットにイレッサの副作用情報を書き込みました。正確な情報。副作用で死ぬこともあると。この薬で被害にあったら地獄の苦しみだと。

## 患者は「効く」という言葉に反応します。危険情報はより大きく開示して<証言>

わずか6年で787人も副作用で死亡したのは事実です。はっきり認識して危険情報ははっきり知らせて、それでも使うのであれば自己責任です。私は真の自己選択が出来なかったのです。



### イレッサ裁判を傍聴して 青葉調剤薬局 事務

今度の裁判は“イレッサは危険な薬では”と医者に問いかけたのに使用したケースと、“イレッサを使いたい”と医者に申し出て使用したという対比的な2件でした。

“間質性肺炎で死亡例も出ている”という表現は耳にしていますが、間質性肺炎の症状があんなにひどい状態になるとは知りませんでした。言葉だけだと、肺炎の軽いようなもの？という認識でした。

裁判の後半で、イレッサを認可したときの資料が厚生労働省から提出されたようですが、その資料が黒色で塗りつぶされている箇所がたくさんあるということが明るみに出ました。なんで世の中は、こんなに黒色の部分があるのだろうと少しさびしくなった日でした。

いつ自分が被害者、加害者になるかわからない！！という思いで、日々送れるといいのかもしれないなあと思いました。

原告本人尋問を傍聴して 青葉調剤薬局 薬剤師

原告のこんなに辛い話を聞いた後に、「病気そのものがだいぶ進行していたんですよね。脳や骨にも転移していたんですよ。タバコも吸っていたみたいだし。イレッサの前にやった化学療法の副作用もたくさんありましたね。それにイレッサの副作用のことは新聞などで知っていましたね。同意書には書いてあるし、説明を受けたのですよね」と畳み掛ける被告代理人の反対尋問に、怒りを感じました。「たしかに同意書に書かれているが、詳細に、どういう状態になる可能性があるかを聞いていたら使用しない選択もあったかもしれない」という発言が印象に残りました。私たちのまわりにも、いろいろな同意書がありますが、どこまで説明しきれているでしょう。

本人尋問が終了した後、今後の進行協議が行われました。原告側が以前から求めている被告側資料が、なかなか提出されないことや、今回の原告尋問で被告側から突然出された資料があることが問題になっていました。イレッサの治験資料にたくさんの黒塗り部分があることについて、厚生労働省には黒塗りしていないものがあるはずなので、それを提出するよう求めました。被告代理人は厚生労働省にも黒塗りの資料しかないように返答し、そんな資料に基づいて承認審査がされているのかと原告側が強く迫る場面もありました。

10月15日(木)に昨年秋に追加提訴した原告の本人尋問が予定され長引きそうです。 私たちも最後までしっかり支援していきたいと思います。

